

【書き下し文】

嗚呼ああ哀しいかな。兄の子有り甫と曰ふ、服を斯こゝに制し、徳を斯しよに紀し、石に斯まじに刻む。或曰はく、「豈に孝童の猶子なるか、奚ぞ孝義の勤むること此くのごとき」と。甫泣きて対へて曰はく、「敢へて是れに当たるに非ざるなり、亦た報ゆるを為すなり。甫昔病に我が諸姑こに臥し、姑の子又病む。女巫ぢよふに問へば、巫曰はく、『楹をの東南隅に処る者は吉なり』と。姑遂に子の地を易へ、以て我を安んず。我是れを用て存し、而して姑の子卒す。後に乃ち之を走使より知る。甫嘗て人に説くこと有り、客將まじに涕なみだを出ださんとし、感ずる者こと之を久しくし、相ひ与に諡おくりなを定め義と曰ふ」と。

君子おもへ以為らく魯の義姑なる者は、暴客に郊に遇ひ、其の携へる所を抱き、其の抱く所を棄て、以て私愛を割つと。県君これ焉有り。

是こゝを以て茲の一隅を挙げ、彼の百行を昭あきらかにす。銘して韻せず、蓋し情至れば文無し。其の詞ことばに曰はく、「嗚呼、有唐の義姑、京兆杜氏の墓」。

【現代語訳】

ああ悲しいなあ。兄の子がいて杜甫というが、ここに喪に服し、ここに故人の徳を記し、墓誌を石に刻む。ある人が言うには、「あの孝童さんの甥ですよね。どうして親孝行をこのようにつとめられるのか」と。杜甫は泣きながらこたえて言うには、「とんでもないことです。同じ様に親の恩に報いるのです。私は昔、病気で叔母さんのところで臥し、叔母の子どももまた病気だった。女性の祈師に尋ねると、祈禱師が言うには、『柱の東南側にいると、運氣が良くなります』と。叔母さんはかくて子どもを場所を変え、そして私の寝場所を移してくれた。私はこのおかげで生きているが、叔母の子は死んだ。後になってやっとこのことを使用人から聞いた。私はかつて人にこの話をしたことがある。その人は涙を今にも流そうとし、感じ入った状態のまま長く時間が経った。その人と一緒に諡を決め、『義』と言う」と。

君子が考えるには、魯の国の義姑は、暴徒に郊外で遭遇し、その連れてくる子（兄の子）を抱き、その抱いている子（自分の子）を棄て、それで私情を断ち切った。叔母はまさにこれである。

こういうわけで、この一例を挙げて、故人のあらゆる行いを明らかに示す。銘文を作るが通常のような韻を踏まない。思うに、感情が極まれば文を飾ることはない。その墓誌銘に言うには、「ああ、唐王朝の義姑、長安の杜氏の墓」。